Letter to the Editor

第19回国際質量分析学会を終えて

19th IMSC Report和田芳直^{1,2}

Yoshinao WADA

¹ 組織委員長 *Chair of the Local Organizing Committee*² 大阪府立母子保健総合医療センター *Osaka Medical Center and Research Institute for Maternal and Child Health, Izumi, OSAKA, JAPAN*

第19回国際質量分析会議 (19th International Mass Spectrometry Conference; 19th IMSC) を2012年9月15日から21日まで7日間にわたり国立京都国際会館において開催した。50年以上の歴史をもつIMSCとして初めての欧州外開催である。IMSCはInternational Mass Spectrometry Foundation (IMSF) が3年ごとに開催する学術集会であり、IMSFの加盟団体である日本質量分析学会が2012年会議を京都で開催することの指名を2006年に受け準備してきた。今回のIMSCは日本学術会議 (内閣府) の共同主催国際会議に選ばれたので、3団体 (IMSF, 日本質量分析学会, 日本学術会議) による共同主催会議となった。また、日本質量分析学会は今回の19th IMSCを第60回質量分析総合討論会とみなした。

最終報告には少し時間をいただかねばならないが、会議の結果を速報としてお伝えする。なお、IMSCに先立ってサテライトとして高野山で開催したサマースクールについては新聞秀一世話人による報告を見られたい。

19th IMSCの京都開催は2006年の17th IMSC (プラハ) で決定した。そして、実質的な準備開始を第18回IMSC (2009年8月ブレーメン) に定め、組織委員会編成、会議運営会社の選定、ホームページ制作、スケジュール作成、ファーストサーキュラーに代えた栞の作製を行った。その後、米国質量分析学会などでの宣伝活動を続け、2011年にプログラム委員会を発足させて学術集会としての内容を具体化した。

事前参加登録は2011年12月1日に開始した。参加登録費は2012年7月10日までの早期事前参加登録が、一般参加35,000円、学生10,000円、同伴者5,000円、バンケット10,000円、7月11日からの後期事前参加登録では一般参加45,000円 (学生、同伴者、バンケットは不変) とし、8月20日をもって事前参加登録を締め切った。事前参加登録者数は1,649であった。

会議は9月15日 (土) 午前10時からショートコース (教育講座) とスポンサー企業ユーザーズデイによって始まった。3枠並行で開催したショートコースでは、イオン解離法についてR. Zubarev (スウェーデン)、イメージング質量分析について瀬藤光利 (浜松医科大学) が担当し、質量分析学の基礎講座はD. Sparkman (米国) とJ. Gross (ドイツ) が交代で務めた。

午後2時から、メインホールにおいて田中耕一 (19th IMSC共同議長) による公開講座「科学技術にマスマス貢献する質量分析: 最先端の研究は、基礎的な学習から」を開催した。将来の科学を担う高校生や大学生を主たる対象とした企画に保護者も含めた1,200名が集まり、スクールバスによる団体参加もあった。公開講座の司会進行は日本質量分析学会関西談話会代表世話人の片木宗弘が務め、組織委員長 (和田) の挨拶に続き、講師である田中 (ノーベル化学賞受賞者) が質量分析の原理を解説した。途中、振り子の共振現象を舞台で実践した。休憩時間には参加者自らが実験を行えるコーナーと一般の人からの質問に答える「質量分析とは」コーナーを会場前に作った。講演後のQ&Aでは高校生や大学生から活発な質問があった。

会議2日目の9月16日 (日) にはIMSF役員によるIMSF運営委員会およびIMSF各国代表委員会を開催した。バルセロナとトロントが立候補した2016年の21st IMSCの開催地は投票の結果トロントとなった。また、IMSCの間の奇数年にIMSFスクールを開催することとし、2013年はイタリアのシエナで開催することが承認された。

和田芳直 (Yoshinao Wada); 大阪府立母子保健総合医療センター (〒594-1101 大阪府和泉市室堂町840); e-mail: waday@lab.mch.pref.osaka.jp

(Received October 4, 2012; Accepted October 4, 2012)

開会式（2012年9月16日国立京都国際会館メインホール）

左から田中耕一（共同議長）、荒川隆一（日本質量分析学会会長）、Marcos Eberlin（IMSF会長）、和田芳直（議長、組織委員長）、春日文子（日本学術会議副会長）、門川大作（京都市長）、Josh De Andrea（逐次通訳者）。

19th IMSC開会式に先立ち、N. Nibbering（オランダ）、M. Gross（米国）による二つの教育講演（tutorial plenary lecture）を行い、それぞれが気相イオン化学とプロテオミクスについて自らの研究成果も交えて解説した。

開会式は17時からメインホールにおいて挙行し、和田組織委員長（議長）による開会宣言、IMSF会長M. Eberlin、荒川隆一日本質量分析学会会長、春日文子日本学術会議副会長の主催者挨拶、門川大作京都市長の来賓挨拶（逐次通訳）のあと、野田佳彦内閣総理大臣メッセージを田中共同議長が代読した。

開会式に続く最初の全体講演（plenary lecture）では、濱田泰以（京都工芸繊維大学）が伝統工芸職人の動作解析を中心に、質量分析とは異なる計測科学話題を提供した。講演終了後の会館庭園を開放してのウェルカムミキサーでは参加者が旧交を温める姿が多く見られた。

会議3日目9月17日（月、祝日）からは、全体講演（8:00-8:45）、5会場同時進行による口頭発表セッション（9:00-11:00）、ランチョンセミナーを挟んで前後にそれぞれ奇数および偶数のポスターコアタイム、午後の口頭発表セッション（15:00-17:00）、ワークショップ（17:15-19:15）の基本プログラム構成で進めた。月曜日と火曜日のワークショップ時間帯に第3回アジアオセアニア質量分析会議を開催した。

口頭発表セッションは40分のキーノート講演と各20分の口頭発表4題により構成し、午前・午後の各2時間、期間を通じて45枠を設けた。座長はプログラム委員として当該セッションの編成を行った者が担当した。プログラム編成にあたっては、気相イオンの化学や質量分離といった質量分析の学術的・技術的中核、生命科学や環境分野などへの応用研究をテーマとするセッションを会場の収容人数も勘案して5会場に配置した。特に、質量分析の基礎科学・技術（fundamental）のセッションを欠かすことなく配置したことについて参加者から好評を得た。また、部会的な性格をもつセッションはなるべく同日の午前と午後配置することで参加者の便宜を図った。

会議5日目9月19日（水）朝にトムソンメダルとブルネー賞の授賞式、引き続いてブルネー賞受賞講演を行った。トムソンメダル受賞講演は翌日9月20日（木）17:10-18:10に行った。受賞者はトムソンメダルがR. Aebersold, A. Makarov, F. Turecekの3名、ブルネー賞はZ. Ouyangであった。IMSCが次回から2年ごとになるので、今後は2名までの受賞者数となる。なお、Aebersoldは授賞式に来日できなかったため、授賞式では和田が代理としてメダルを受け取り、Aebersoldには翌日の受賞講演の前にメダルが手渡された。JMSアワードはワイリー社が支援するIMSFのトラベルアワードで、通常の口頭発表セッション枠の一つを使い9月20日午前中に4名の受賞者（5名のうち1名は不参加）による講演を開催した。

9月20日のバンケットはトムソンメダル受賞講演のあと400名余りが出席してグランドプリンスホテルで開催した。宴では芸妓・舞妓4名と地方さん1名が華を添え、舞踊のあと出席者と並んで写真に収まる風景が見られた。また、Eberlin IMSF会長、IMSF副会長（C. Costello）、和田および3名のトムソンメダル受賞者による鏡割りが行われた。バンケットを盛り上げたのは、開宴前から宴を通じての学会員有志による合奏で、飛び入り演奏者の参加というハプニングがあるなど、バンケットは友好的で和やかな雰囲気となった。自ら企画し、見事な演奏を披露した彼らに感謝したい。

前後するが、台風16号が17日未明に九州西方海上を北上したが参加者への影響はなく、18日が雨天であった以外は天候に恵まれた。また、9月18日には、IMSF役員、各国学会（IMSF affiliatesという）の会長、全体講演者とその座長、日本質量分析学会名誉会員の計85名を招いてのディナー（IMSF dinner）を南禅寺順正にて開催し、各国学会の絆を深めたことも記しておく。

最終日9月21日（金）、午前の口頭発表セッションのあと、会議は大詰めを迎え、スイス質量分析学会のR. ZenobiとM. Suterによる次回2014年IMSC（ジュネーブ）紹介、G. Cooksによる全体講演から閉会式へと進んだ。閉会式ではEberlin

会長が今回の京都開催はいろいろな面で完璧で、この成功によって今後IMSCが世界各地で開催できることが証明されたことなど、日本質量分析学会と組織委員会に対する感謝のこぼれを述べた。閉会式後のフェアウェルパーティ Arigato & Sayonaraでは、晴れ渡った空の下、庭園で別れを惜しむ参加者の輪がいくつも見られた。

参加登録者数は1,819で、内訳は一般1,538（国内721、海外817）、学生281（国内122、海外159）であった。前回ブレイメンの1,979（一般1,487、学生492）より8%少ないものの、一般参加者数は上回った。国別・地域別では、52カ国・地域にわたり、日本46.3%、欧州（27カ国、ロシアを含む）20.9%、アジアオセアニア州（日本を除く19カ国）21.2%、南北アメリカ（4カ国）11.5%、南アフリカ1名と半数以上が海外からであった。また、同伴者73を加えた参加登録者数は1,892、企業展示登録バッジ発行数149を加えた総参加者数は2,041であった。この数は前回ブレイメン（2,473）より18%少ないが、その差は学生参加者数（ブレイメン492）と企業バッジ数（ブレイメン447）による。

以上、欧州外で初めての第19回IMSCは、多くの参加者を得て、参加者の満足度も高く成功であったと思うが、それは、日本質量分析学会発足後60年間、諸先輩によって営々と積み上げられた学術研究、企業との連携、国際交流のたまものである。招致の意思決定から7年余にわたる準備、そして開催を支えていただいた会員諸氏に対し、組織委員会を代表して深く感謝します。